提案

CMPSは地域の知の拠点となれるのか

丁　　貴　連

宇都宮大学HPには、「国際学部付属多文化公共圏センターは、大学と地域の連携を通して“多文化公共圏”を研究・実践していく上での「拠点」になるために開設された」と掲載されている。果たしてCMPSは知の拠点として地域発展に貢献しているのであろうか。

「問題提起」で指摘したように、設立当初のCMPSは外国人児童生徒への教育支援やグローバル教育、３・11東日本大震災と原発事故、日光研究、田中正造とアジアといった地域社会が直面する課題を次々と取り上げ、その解決に向けて活動を行なってきた。その結果、HANDSプロジェクトと福島乳幼児・妊産婦プロジェクト、田中正造とアジアがメディアに取り上げられるなどCMPSの活動は学内外から注目を集めた。

ところが、こうした成果と違ってCMPSに対する学内の評価はあまりよくなく、とりわけ2019年度は執行部から「実績が不十分だ」「活動の広がりが感じられない」「活動の中身や成果が見えないので見えるかを目指すべきだ」という厳しい指摘を受けた。これらの指摘をそのまま受け入れるわけにはいかないが、執行部から指摘された箇所は必ずしも的外れではなく、むしろCMPSの抱える問題点を浮き彫りにしているように思える。何か問題なのか。その理由を考えるにあたって、「グローバル教育セミナー」の「（４）課題と今後の展望」について述べた重田康博教授の次の指摘は示唆に富む。

> 地域の生活やまちづくりなどについて、フェアトレードやフェアトレードタウンの活動と結び付けて行ってきたが、長年活動していると それもマンネリになってきてしまうし、担当者も高齢化していくという問題もある。（下線は筆者）

氏によれば、12年間に渡って行われてきたグローバル教育セミナーは新しいこと、挑戦的なことをしようとした当初の高い理念とは裏腹に、次第にその熱意がどこかへ行ってしまい、いつの間にかマンネリ化に陥ってしまったという。この場合のマンネリとは、セミナーの質が損なわれていたということよりも、続けていく内に方法や形式、中身が型にはまり、セミナーの独創性や新鮮さを失っていたことを意味する。問題は、同様の現象が他の事業は無論、CMPS全体の活動にも見られていることだ。

2008年度から2020年度までのCMPS年報の目次を見ていくと、2015年度を境にCMPSの活動は主要事業４つを中心に絞られ、そのやり方もグローバル教育セミナーのように形式化・様式化・パターン化していったことが確認できる。つまり、各事業のマンネリ化が進むにつれて、CMPSの評価も次第に厳しくなり、執行部からは「活動が見えにくい」から「見えるように工夫すべきだ」という指摘を受けるまでに至ったのである。

評価がすべてではないが、予算が削られるなど影響は大きい。だからこそ対策を講じねばならない。そのためには、まずCMPSの活動が誰のために何のためにあるのかということを我々自身が理解する必要がある。次に、CMPSが知の拠点となるためには、個々の教員の力だけでは難しい。それぞれの専門知を持った教員が多様な議論を戦わせながら、総合知を作っていく「場」が必要だが、その役割をCMPSが果たしてくれることを提案したい。